

## か にほんじん ろうどうかん 変わりつつある日本人の労働観

はたら はち かいしゃにんげん い かりうし せかいご つく  
「働き蜂」とか「会社人間」とか言われ、「過労死」という世界語まで作  
だ にほん いた おお へんぼう  
り出した日本のサラマンであるが、どうやらここに至って、大きな変貌を  
と あらわ した  
遂げつつあるようだ。それを表すのが下のグラフである。

だい しごとじゅうし い しごとじゅうし こ  
50代では「仕事重視、どちらかと言えば仕事重視」が65%を越えるのに  
たい せだい さ ひりつ ていか だいいか しごとじゅうし  
対し、世代が下がるにしたがってその比率は低下し、20代以下では「仕事重視、  
しごとじゅうし お こ せいかつじゅうし い  
どちらかといえば、仕事重視」は36%に落ち込み、「生活重視、どちらかと言  
せいかつじゅうし たすうは  
えば生活重視」が63%と多数派になっている。

こじん はたら かた しゅうしんこようせい ねんこうちんぎん こようかんこう  
個人の働き方は、これまでも終身雇用制や年功賃金などの雇用慣行の  
えいきょう う てんけい しゅうしんこようせい もと み こころ かいしゃ ささ  
影響を受けてきた。その典型が、終身雇用制の下で身も心も会社に捧げ  
はたら かいしゃにんげん おっと ささ せんぎょうしゆふ つま  
て働いてきた「会社人間」の夫と、それを支える専業主婦の妻であっ  
あき はたら かた へんか しゅうしんこようせい くず  
た。だが、明らかにこのような働き方は変化しつつある。終身雇用制が崩  
さいす たいしょう い いま かいしゃ れいがい  
れ、40歳過ぎればリストラの対象と言われる今の会社にあつて、例外は  
わかもの なか ひと かいしゃ ちようきかんきんむ しょうしん めざ  
あるものの、若者の中では一つの会社に長期間勤務して昇進を目指して  
はたら かた しょうすう しゅつせ しょうしん じぶん しゆみ  
がんばるという働き方は少数であり、出世や昇進よりも自分の趣味や  
かていせいかつ たいせつ こうそくせい よわ はたら かた しこう もの ふ  
家庭生活を大切にし、より拘束性の弱い働き方を志向する者が増えてい  
るのである。

その一つに、大学を卒業しても定職に就かず、短期間のアルバイトな  
どをして過ごす若者、いわゆるフリーター問題がある。先日も NHK が「フ  
リーター417万人の衝撃」という特集（2004.02.07）を組んで報道した  
が、その数字は驚くことばかりだった。「フリーターの数はここ10年で2倍  
になり、今や労働人口の5人に1人がフリーターである。フリーターの  
生涯賃金は正社員の4分の1、平均納税額は正社員の5分の1であり、  
フリーターがこのペースで増え続ければ、2010年には経済成長率を1.9%  
押し下げるという試算もある。」という。

かつてフリーターといえば、社会にも時間にも拘束されず、気ままに過ご  
している若者のイメージがあった。しかし、一口にフリーターといっても、  
理由別に分類すると「モラトリアム型」（やりたい職業が見つかるまでの  
猶予期間として選択した者）が46.9%、「やむを得ず型」（正規採用になれ  
なかつたり、倒産やリストラで失職したりして、しかたなくフリーターを  
している者）が39.4%、「夢追求型」（何か明確な目標を持った上で、生活  
の糧を得るがために、自由に時間が使えるフリーター生活を選んでいる者）  
が13.7%と、実に様々である。（日本労働研究機構「大都市の若者の  
就業行動と意識」より）

そして、NHKがさらに聞き取り調査を進めてわかったことは、「夢追求型」

はさておいて、「やむを得ず型」はもとより、「モラトリアム型」のほとんどが、不況のあおりを受けて、「正社員」としての就職の機会が狭められたために、正社員になりたくてもなれず、諦めてフリーターになっている。という現実であった。なんと日本の若者の五分の四が、非自発的なフリーターの境遇に置かれているのであり、この現状を考えないことには、フリーター問題の解決策も見いだせない。現在のフリーターは、バブル期の気楽なフリーターとは全く性格を異にしており、単なる若者たちのライフスタイルの問題としてだけ語るわけにはいかないのである。